

## 第1章 歴史意識とオーストラリアのカリキュラム

担当：星瑞希（東京大学大学院）

### ○Author Bio

Tony Taylor…ケンブリッジ大学で博士習得以前はイギリスのコンプリヘンシブ・スクールで教鞭を取る。1981年から2014年にかけてオーストラリアで高等教育に従事（モナシュ大学）。1991年に歴史教育の国家調査を指揮し、2001年の調査レポートを執筆。国立歴史教育センターの局長、ACARAの歴史教育コンサルタントに就任。主な共著に *Place and Time: Explanations in Teaching Geography and History*



### ○Technical Term

New Social Studies Movement…新社会科運動      historical consciousness…歴史意識  
History War…歴史戦（争）

### ○Agenda

- ・探究ベースの歴史教育を推進する歴史教育学者の歴史意識とは？
- ・なぜ、オーストラリアでは英米圏の歴史学、歴史教育、社会科教育の研究動向と公的カリキュラム改革が連動しているのか（日本の場合、歴史戦は保守派の政治家やメディア VS 学校の歴史（歴史学者）という構図であるが、豪州の場合、そこに社会科教育学者が関与していることが興味深かった）？
- ・歴史学者や教育学者が国家カリキュラム作成に関与することのメリットとデメリット、特に政治論争に巻き込まれることをどのように捉えるか？

### ○Abstract

#### 導入

・現代オーストラリアで歴史を教授学習することはこれまで論争となってきたおり、それゆえ、歴史のオーストラリア国家カリキュラムを作成する際に前提となる出来事の論争的性質を理解することは、**歴史意識とカリキュラムに関する知識**の両方に関する現場教師の教育観にとって重要である。

**歴史意識**の側面：単に過去を知ったり理解することを超えて、個人や集団の過去理解が形成され、いかに現在や将来に影響を与えるかのプロセスを理解することを含む

**カリキュラムに関する知識**の側面：カリキュラムに関する過去、現在、将来の文脈を理解することを意味する

・本章では、2008—2010年のオーストラリアのカリキュラム草案以前の時期に焦点を当て、カリキュラムの背景にあるもの、カリキュラムをめぐるダイナミクス、これからの方向性について議論す

る。

#### 現代オーストラリアにおける歴史の教授学習の背景

・1980年代まで、オーストラリアの中等歴史教育は伝統的なスタイルであった。

例：チョークアンドスタイル、断続的な色とりどりの逸話など

・1970年代になると、人文科学の学科ごとに分離されたアプローチへの批判が高まり、1980年代にはアメリカ由来の**新社会科**が代わりとなるカリキュラムを提供した。

**新社会科カリキュラム**：事実、概念、一般化のテンプレートを全ての人文科学の学科で使用

統合学科として、1つの学問で用いる知識やスキルを他の学科で獲得した知識やスキルと組み合わせることができる

・1989年にオーストラリア教育省の年次会で、「社会と環境の学習 (SOSE)」という完全に統合型社会科モデルのK-10カリキュラムモデルを州やテリトリーで教えることが決まった (ニューサウスウェールズ (NSW) などの例外はあった)。

**SOSE**：フェントンの知識とスキルの要素に加えて、価値が加わり、環境についての学習が特徴的

→歴史の知識やスキルは、時間 (Time)、継続と変化 (Continuity and Change) に限定された。

・学校レベルでは教科としての歴史や、成果としての歴史意識は急激に減退した。

#### ニューヒストリー運動

・ニューヒストリーと呼ばれる別のカリキュラム運動が1960年代の英国で始まり、1970年代には普及し、1980年代には中等歴史教育の主流となり、1980年代にはオーストラリアに到達し、2010年にはオーストラリアの歴史カリキュラムの一部を占めるようになる。

・ニューヒストリーというイギリスの考え方は20世紀初頭の暗記学習として始まった教科を発展させようとしたものであったが、生徒の関心の観点からすると、退屈なもので終わった

・ニューヒストリーの理論の起源は英国の教育哲学者ポール・ハーストの7つの「知識の形態」があるという議論にある。

・*New Movements in the Study and teaching of history* (1970) などいくつかの書物やパンフレットが出され、教師中心の古い教授スタイルから、学識に基づき組織立てられた教授法の開発が目指された

#### 学校評議会歴史プロジェクト (SCHP) (1972~)

・主な目的は、9年生から11年生にかけてトピックの系列を通して、主に一次資料を吟味することによって歴史的思考を発達することであった。

・このプロジェクトは革命的なことであり、シュミルト (1980) の *History 13-16 Evaluation Study* においても絶賛されている。

・課題は、二次資料を差し置いて一次資料を重視しすぎたことや、時系列全体を包括しない断片化された一貫性のない問題など、学校レベルや、シラバスへの適応に関するものであった。

・1989年のナショナルカリキュラム初版が導入されると、SCHPは英国における中等歴史教育の主要なアプローチとなり、ナショナルカリキュラムに3つの観点で影響を与えた。

- (1)証拠の使用、因果関係、エンパシーに基づく歴史の探究ベースの思考方法
- (2)歴史は出来事の時系列に沿って進めなければいけないという考えは効力を失った
- (3)学校の歴史は単一の必然的な結論に導かなければいけないという考えも妥当性を失った

#### 学校評議会歴史プロジェクトとオーストラリア

・1970年代後半から、オーストラリアの一部の歴史教育者はSCHPに関心を持っていたが、それは3つの観点からであった。

- ①教師が関与するカリキュラム改善のプロセスの模範となるモデルを提供している
- ②歴史教育のディシプリンの（disciplinary）性質に対して堅実な哲学的基礎を提供する
- ③SCHPのシラバスは、深い学習、地方史、現代史、通史で形式が異なっていた

・NSWの歴史教育者は1977年にSCHPのチームを訪問し、新しい歴史の概念が1992年の中学校シラバスには含まれることとなった。しかし、1999年のカリキュラムは重要な出来事の長いリストの羅列となった。他の州やテリトリーではSOSEが普及した。

→オーストラリアの学校において、真正な歴史教授法と歴史意識は未だに乏しい状態であった。

#### SOSEの生死

・保守派の政治家やメディアはSOSEに歴史がないことで、オーストラリアの歴史を祝福する学習が明らかに不在であることを遺憾に感じながらも大きな動きはなかったが、1996年にハワード首相のもとで自由党国民党の連立政権が誕生すると、学校の歴史は政治の対象となった。

・ハワードはオーストラリアの歴史を大半が善意に溢れる出来事の時系列と捉え、不幸な出来事があったことも認めているが、それらは過去のものであり、時間や態度は変化したと捉えている。

・ハワードは首相就任から四か月後、1996年7月の主要な演説で、左派とされる歴史家を、党派的な政治的大義のために罪を犯した「文化の栄養士（cultural dietitians）」として攻撃し、自らの見解を公にした。この演説は、学校の歴史を乱闘に引きずり込んで、今後11年間、メディアと政治の中でオーストラリアの保守的な少数派の意見に取り付かれた文化的衝突、つまり歴史戦の開始の象徴となった。

#### 国の調査

・1990年代半ばに、オーストラリアの歴史学コミュニティの大家であるジョン・ハーストとスチュワート・マッキンタイアは教育大臣デイビット・ケンプに面会し、学校の歴史に国の調査が入れることを決定した。【専門家による歴史コミュニティ】は、SOSEが主流の教育システムにおいて、その科目に公平なチャンスが与えられることを期待し、【保守的な政治家や論説者】は学校における左派的な影響を気にし、そのような調査がそうした最悪な信念を裏付けることを期待した。

→調査は1999年にモナシュ大学のメンバーによって実行され、最終レポート（*The Future of the Past: The Final Report of the National Inquiry into School History*）が2000年に刊行された。

## 報告書の要点

- ①歴史はスペシャリストである教師にディシプリンの枠組内で仕事を要求する特殊な学習形態
- ②生徒はエビデンスベースで概念主導（歴史理解とスキル）アプローチを用いてトピックを深く学ぶ事ができるなら、その教科をよく学べる
- ③学校の歴史への政治的干渉は逆効果であり、規定された年代順のシラバスの賦課も同様に逆効果
- ④小学校教師や専攻外の中等学校教師は歴史を教える能力が不足している
- ⑤現在の SOSE の枠組みで地位の低い歴史の授業が明確に識別されなければ、歴史のディシプリンは苦境に立ち続ける
- ⑥オーストラリアの歴史は不人気で、生徒は退屈し、くどいものと捉えている

## コモンウェルス歴史プロジェクトと歴史意識の勃興

・国立歴史教育センター（NCHE）は歴史意識を勃興させるための取り組みを行うために、3年間の請負仕事を2つ連続して行った（*Making History* の出版など）。

例）・*Making History* のトピック本：良い実践の構成要素を広め、単元のモデリングを行うことで歴史教育の専門的知識の学校レベルのギャップの解消

・*Making History: A Guide*：近年の歴史教育の動向を要約し、SOSE の時間や継続と変化に変わる概念枠組みとして従来考案された歴史的リテラシーの考え方を教師に提示した。

・NCHE の指標には歴史的思考概念として、証拠の使用、継続と変化、動機（視点）、意義、エンパシー、論争性（contestability）が含まれた（下線は豪独自）。

・NCHE のアプローチは各学校にコピーが1部配布され、NCHE のHP で各書籍の無料PDFをダウンロード可能にした（例：<http://pandora.nla.gov.au/tep/31185>）。

## 歴史サミットと様々な歴史意識

・2006年1月にハワードは学校における豪州史を徹底的に変えることを宣言し（彼は過去に対する事実ベースアプローチを要求）、8月17日に歴史家、ジャーナリスト、教師、その他の教育関係者を招待し、サミットを開催。

・サミットは2つの議題に集中し、1つはSOSEの批判、もう1つは豪州史の初等、中等シラバスの草稿の概要についてであったが、反対意見もあり、実質的な成果は得られず終了。

・サミット終了後も、豪州史のシラバス作成に向けた動きは続き、2007年10月に「学校の豪州史教育の首相ガイド」が刊行されたが、オーストラリアの歴史における77の本質的な事実と100の推薦された伝記の伝統主義者のリストが来て、1999年の専門職的に不評なNSWの100時間シラバスを思い出させた。

・2007年に連立政権は敗北し、労働党のケビンラッドが首相に選出されると、2008年初頭にはハワード政権の歴史ガイドを葬り去った。

・2010年には、オーストラリアカリキュラム評価報告局（ACARA）によって、探究ベースの世界史カリキュラムが刊行され、「証拠」、「継続と変化」、「原因と結果」、「視点」、「エンパシー」、「意義」、「論争性」の7つで特徴付けられた。

・エンパシーと論争性を除けば、理解とスキルに特徴がある *Making History*2003 年版の歴史リテラシーは、Lee や Ashby (英)、Levstik や Barton、Wineburg (米)、Seixas や Letourneau (加) によって他の自由民主主義国家にも広がっている。